小泉堯史監督　インタビュー

水戸一高 昭和 39 年卒の小泉堯史さんは、黒澤明監督の助監督を長く務め、ご自身の監督デビュー作の『雨あがる』(黒澤明脚本)でヴェネチア国際映画祭 緑の獅子賞を受賞されるなど、これまで幾つもの名作を世に送り出してこられました。

最新作「峠 最後のサムライ」は新型コロナウイルスの影響を受け公開が延期されていましたが、このたび公開日が 2021 年 7 月 1 日に決定したことを受け、知道会では 3 月 28 日、小泉監督に知道会館へお越しいただきインタビューを行いました。映画への思い、作品への取り組みなどを、高校や同級生の思い出とともに語っていただきましたのでご紹介します。

【小泉堯史監督プロフィール】

1944 年 水戸市生まれ。水戸一高から東京写真短期大学（現 東京工芸大学)、早稲田大学文学部を卒業。大学卒業後、黒澤明監督に師事し、長く助手、助監督として支える。黒澤監督の遺作脚本を映画化した「雨あがる」で監督デビュー。代表作には「雨あがる」(1999・監督)、「阿弥陀堂だより」(2002・監督／脚本)、「博士の愛した数式」(2005・監督／脚本)、「明日への遺言」(2007・監督／脚本)、「蜩ノ記」(2013・監督／脚本）など。

小泉堯史監督

―母校や水戸に帰ってくるのは久しぶりでしょうか？

水戸一高に来るのは卒業してから初めてじゃないでしょうか。様変わりしていて、驚いています。クラス会で「39 会」というのがあって、それは必ず出るようにしています。その時だけですかね、水戸に戻ってくるのは。

撮影では、今度公開する『峠』の撮影で弘道館の「尊攘」の書を撮らせていただきました。その時は水戸に来ました。

―高校時代の思い出などはありますか？

思い出というか、今でも水戸一高の同級生たちにはお世話になっています。ずっと繋がっていて、途切れることはないですから。

例えば撮影で、主人公の河合継之助と幼馴染の藩士川島億二郎が、弓道場で弓を引いている場面があるんですよ。そのとき、同級生で弓道部のキャプテンだった白石君に指導に来てもらいました。それから大久保君という人には、役所広司さんが詠う「詩吟」の指導をしてもらったりしてね。学友たちにはエキストラにも参加してもらっています。

優秀な友達に恵まれたと思います。僕は剣道部にいましたが、楽器に凝ったりして、テナーサックスを持っていました。「Mito 1st Jazz Band」というバンドで学苑祭も出ました。楽しかったよね。音楽で才能があった仲間には、今でもプロでやっている人がいます。

当時は学校に自動車部があって（編注：当時の運転免許制度では 16 歳で 360 cc以下の軽 4 輪を運転できる「軽免許」を取得できた)、寄贈された軽トラックがあったのでそれに乗って、昼休みに南町の「吾妻庵」まで蕎麦を食べに行ったりもしました。

―映画の道に行くきっかけは？

実は高校時代は映画って観たことないんです、写真や映画が嫌いで。これが全然合わないんですよ、当時はね(笑)。高校を卒業してから写真の方に行ったんですけれど、やっているうちにこれは面白いと思うようになりました。ちょうどベトナム戦争の頃で、戦場カメラマンや海外の人々の暮らしを撮影する人たちがいた。そういう人に惹かれて、勉強をしようかと思って、早稲田に行って、そんな中で黒澤明さんの映画も観て、これも面白そうだなと思いました。黒澤さんのもとで学びたいと思って、自分で手書きで手紙を書いたり、電話をしたりして、運よくそこに潜り込めた、という感じです。

―いま水戸市を含め茨城県では映画等の撮影誘致事業（フィルムコミッション）に力を入れています。今後、茨城や水戸での撮影などは考えていらっしゃいますか？

作品にもよるんですよね。もしそういう作品が書ければ、ぜひ茨城県や水戸市のフィルムコミッションにも協力してもらいたいなと思います。今は、昔黒澤さんとやっていたときとは違って、フィルムコミッションの協力がないと撮影ができないくらい、とても大事です。

今度の作品でも、冒頭に徳川慶喜が出てきて、「水戸学」というものが大事で、それで弘道館での撮影のときにはお世話になりました。

―その新作『峠 最後のサムライ』についてお聞きします。新型コロナウイルスの影響で公開延期になっていましたが、いよいよ 7 月 1 日に公開となります。今のお気持ちは。

完成してから 2 年近く経っていますからね。もっと早く届けたかったです。お客さんに届けて初めて終わるんですよね、映画の仕事というのは。届けないことには終わらないので、早く公開して、次に進みたいと思っています。

―撮影のこだわりや、見てほしいポイントなどはありますか？

主人公の河井継之助というのは、幕末の歴史上の人物です。その時代に生きた人には、自分から想像力を持って接して、できるだけ寄り添っていかないと、なかなか心を開いてくれない。その時代を生きた人の「言葉」が大事で、言葉がその人を連れてきてくれる。ひとつひとつの言葉を大切に撮ったつもりです。

もちろん、司馬遼太郎さんの原作が僕にとって全てです。長編の原作をいかに大事にしつつ、2 時間の映画の中に溶け込ませるかが非常に大事です。何とか、司馬さんが描こうと思っていた「河井継之助」を映画の中に捉えられたんじゃないかな、と思っています。

―『知道会報』読者の皆さんや、後輩にメッセージをお願いします。

弱ったなぁ(笑)。「この映画を観てください」というのはメッセージにならないよね(笑)。

水戸のように長い歴史のあるところでは、明治維新への原動力となった水戸学のこともあるし、歴史をどう捕まえるかが大事です。もう一度水戸の歴史を見つめなおしてほしいな、という思いはあります。

水戸一高の校歌にしても、「義人烈士の功績ぞ」という歌詞があります。この「義人烈士」がどういうことをしたのか、きちんとその人を知るということが大事です。それにはやっぱり、その人物に近づいていかないと、心を開いてくれないはずなんですね。「忠孝仁義の大道を」とみんな歌っていますけど、「忠」は何を表し、「孝」は何を表すか。自分でつかみ取らないと、自分のものになりません。校歌ひとつ取っても、歴史の中で捕まえるべきことが色々とあるはずなんです。「至誠一貫」もそうですし、「堅忍力行」にしてもそうです。言葉が今の私たちに伝えてくれるもの、それを、もう一度自分で歩み寄って、つかんでほしいと思います。

校長室　校是の額の前にて

【インタビューに同席してくれた
在校生の根本大輝さん（15 組・演劇部所属）にも質問をしてもらいました】

―在校時には、部活以外にどのような活動をしていましたか？

剣道部はやっていましたが、それ以外だと…。実家が醤油屋だったもので、蔵を借りて近所

のお兄ちゃんたちと集まって楽器をやっていました。今と違って、演奏するような場所が他にないわけですよ。トランペットが面白いと思って買ってもらったけどうまくいかなくて、やっぱりテナーサックスが吹いてみたくなって。ソニー・ロリンズや松本英彦みたいに、楽器一本で世界を回れたら最高だなと思ったんですよ。そういうことやっていたんだけど、結局自分では、音楽はダメだなぁと(笑)。

あと高校生の頃は本をそれなりに、自分の好きな本を早い時期から読んでいましたね。

―生涯にわたって参考にしている作品などはありますか？

監督ではやっぱり黒澤明さんですね。それから日本では、小津安二郎さん、成瀬巳喜男さん。僕はそんなに映画青年でもなかったし、映画観ないんですよ(笑)。自分が気に入ったものだけを見ているので、黒澤さんの作品はどれも好きです。アメリカだとシドニー・ルメットとか、好きな人の作品は大体観るようにしています。

本でも、高校生の頃は小林秀雄さんの『考へるヒント』など非常に好きで読んでいました。若い時に誰の本を読んだかという作家との出会いは大事で、僕はずっと小林秀雄さんの本を読んでいるし、いまだに教わることも多いです。迷ったときにはもう一度読んでみようかなと思ったりしてね。和辻哲郎さんや田中道太郎さんもそうですね。自分が「この人」と思えるような人の本は、生涯大事にしています。気に入ったところには付箋を貼ったりしています。

―読んだ本が創作の役に立つ？

黒澤さんも、ドストエフスキーや、トルストイの『戦争と平和』とか、よく読み込んでいました。20 回以上読んだ、と言っていましたね。脚本を書くときに、黒澤さんは「『戦争と平和』のあそこの場面だよ」みたいに例で挙げるんだけど、もう絵として覚えてるんだね。古典の『平家物語』にしても、誰が何をしたか、細かい場面までよく覚えていて、それが作品を作っていくうえで役に立っている。

今回の『峠』主人公の継之助については、彼が読んだ本、というのもあるわけです。これは一度読んだ本でも、必ず自分でもう一度読み通します。それが人物の描写を深めるうえで大事です。継之助のエピソードに生きてくる。普段からいろいろな本を読んでおくというのが、ものを作るうえでプラスになると思っています。

【小泉監督の映画づくりや黒澤明監督のこと、その他についても伺いました】

●世界への旅

―スーパーカブでヨーロッパを回ったというエピソードがありますが？

黒澤さんが撮影でロシアに行っていたとき、他の現場で助監督をやって得た収入を使って海外に行こうと思って(笑)。インドからパキスタン、アフガニスタン、イラン。ずっとバスを乗り継いで行くわけですよ。パリに行って、スーパーカブっていうオートバイを買って、スペイン、ポルトガル、フランス、イタリアを回って。アルプスに行って、そこで壊れちゃったんだよ、スーパーカブ。1日70kmくらい走って、ずっと旅していました。帰るときはパリから汽車でモスクワに出て、シベリア鉄道に乗ってね。現地で偶然、撮影中の黒澤組のプロデューサーに会ったんですよ。ホテルで「小泉！」と声をかけられて。「お前ここで何してるんだ」と(笑)。そこからナホトカに行って、日本に帰ってきました。

知道会館2階バルコニーにて

その後も、シルクロードだけで3、4回は行っていますね。その写真が売れるんです。今はもう無いけれど、バーミヤン石窟の写真とか、けっこう小遣いになって(笑)。写真撮りながら旅する生活もいいな、と思ったものです。

●黒澤監督との絆

―黒澤明監督はどんな方でしたか？

映画『影武者』で一緒に仕事してからは、一歩も離れたことはなかったですよ。他の監督と仕事をしたこともなかったし。黒澤監督に会えたことが、僕の人生で一番大きな出来事でしたね。

仕事がなくても傍にいるのが好きでした。家族の人も受け入れてくれてね。御殿場に別荘があったんで、別荘について行って、三食のご飯を作って、炊事洗濯全部やって。とにかく一緒にいること自体が嬉しいんですよ。

黒澤さん自身が魅力のある人でなければ、あれだけの映画は撮れないですから。普段の生活もとても魅力的な方でした。黒澤さんは、どんな人に対してもとても丁寧なんですよ。僕が帰るときにも「どうもありがとう」と声をかけてくれてね。

●映画づくりへの思い

―映画を「もう作りたくない」と思ったことはない？

ないです。好きなものだけやっていますから。黒澤さんと仕事し始めてからは、一度もないですね。その人と一緒に仕事を続けられたらいいなという思いだけでした。だから亡くなったときは本当に残念でした。まだまだ 100 歳までがんばるとおっしゃっていたのでね。僕は自分が作らなくてもいいんですよ、黒澤さんの仕事を一緒に手伝えていれば。

『雨あがる』も、本当は自分が撮ろうと思ったわけではなくて、「小泉に撮らせる」と人に言われたところから始まっています。僕は、自分の好きなものだったらやろうと。それ以外はやりませんよ、という姿勢です。それがやれている以上は、嫌ということはないですね。

まだまだ「この人だったら一緒にやってもいいな」と思う人はいるのでね。そういう人とは映画を通して出会ってみたいな、と思いますし、そういう人がいる限りは映画を作りたいと思います。

―役者さんの、一瞬の表情を捉える難しさについて。

今は撮影の仕方もずいぶん昔と変わってきて、みんなモニターを見ながらやるんですよ。僕はそういうのはしたことないんです。フィルムですから、全部。役者が演じているときは、スタッフ全員が集中してその人を見ていないと困る。

本番はできるだけ、一回で決めたいと思っています。何度も繰り返すやり方ではなくてね。僕の場合はカメラを常に 3 台使って、俳優さんが一回でやれるようにしています。今は、俳優さんに何度も同じことをやらせて編集素材を集めるやり方が多いから、俳優さんも疲れちゃうんですよね。剣道でもなんでも、試合は一回でしょう。居合いだって決めるのは一刀ですよ。俳優さんも、その一回に全集中力を詰めてくれるから、いいんです。黒澤さんも、一発 OK が多かったですね。

武石浩玻像の前にて

ただ黒澤さんも、「なんでこんなにやるのかな？」というくらい何回も撮ったこともありますよ。『まあだだよ』という映画のとき、冒頭に「教室でたばこを吸ってはいかん」という台詞のシーンがあるんですよ。これが、台詞ひとつだけなのに一日中やっても OK が出ないんです。みんな何がダメなのか分からないんだけど、後で聞くと分かるんですよ。「黒澤さんが言っていたのはこういうことだったのか」と。

『影武者』のときは、俳優さんの歩き方が気に入らなく

て、その日の撮影が中止になったこともありました。俳優さんの「こう映りたい」という自意識が入ってしまうと、ダメなんですよ。役柄をつかんで、なりきって、それを自然にやるのが難しいんです。

―「3 台のカメラ」の技術は黒澤監督から教わった？

黒澤さんも 3 台のカメラを使っていて、それに慣れてきているのでね。現場を準備するときも、3 台の位置を常にイメージしています。それがどう編集されるのか頭に入っていないと、活きてこないんですよ。助監督時代は、黒澤さんだったら何を考えてどう撮るかを必死に考えて動いていました。経験で、体で覚えていきましたね。監督が「おい」と言ったら、「何ですか？」と聞いているようでは遅い。「小泉！」と呼ばれたら、何をするべきか掴んでいて、「はい」と答えるのです。その直観を研ぎ澄ますには、自分で余計なことを考えないことです。そうすれば黒澤さんの考えが少しずつ分かってくる。そうして慣れて、これからもう少し役に立てるな、と思っていた矢先に亡くなられたのが一番残念なことでした。

―「日本の美しい風景」を取り入れることにこだわりは。

自然は非常に大事ですね。時間とタイミングを間違えなければ非常にいいものが撮れるんです。セットの中とは違う良さがありますね。それに今、美術の予算が厳しいのかセットを作ることが難しくなっていますよね。昔はセットを組むと、一日か二日、セット磨きというのがあったんです。監督もスタッフも一緒になって、柱を磨いたりして質感を大事にしたんだけれども、今は質感なんて言ってられないんですよね。だから今はフィルムコミッションに頼むと、質感のいい柱のある場所を紹介してくれたりね。変なもの作るより、そっちの方がいいな、となるんです。だからフィルムコミッションは大事だし、いい場所を探してくれるのはとても助かります。

●映画音楽について

―「映画音楽」に対する監督の考えは？

映画音楽はとても大事ですね。黒澤さんも、映像と音は「足し算」ではなく「掛け算」にならないとダメだ、とよく言っていました。音楽というのは難しくて、一度書きあがってしまうと、どうにも直らないから。監督ができることは、外すことだけ。それは一番困るんでね。僕が一緒にやっている作曲家の加古隆さんは、早い時期にメインテーマをくれるんだよ。「こういうのどうですか？」と。それは非常に助かっています。

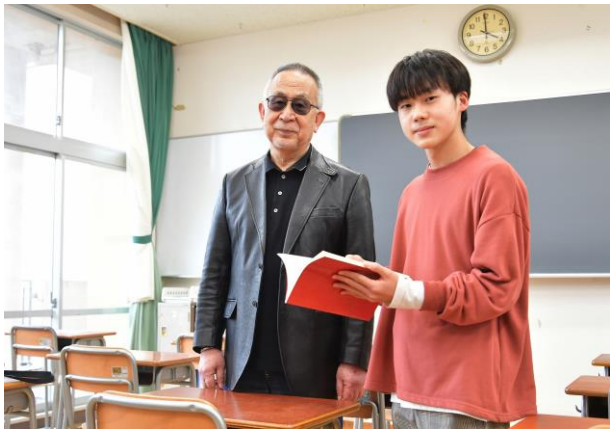
黒澤さんなんか自分で音楽つけちゃうんだよ、クラシック曲なんかから持ってきて。そうすると音楽家は困るわけ、「こんな名曲つけちゃって！」って(笑)。でも映像と音楽が合う瞬間

って、ゾクゾクと来るものがあるでしょ。これが作っている嬉しさなんだよね。それがあれば、「またやってもいいな」ってなるんだよね。

―新作『峠』の音楽も加古さん？

　そうです。今度の音楽は今までとちょっと変わっていると思いますよ、加古さんの中でも。「打楽器を使ってほしい」というのがあったので、そう話して、打楽器を上手く活かしたような曲を作ってくれています。加古さんはクラシックの人だけど、ジャズもやる人でね。幅の広い人ですね。
　主題歌は石川さゆりさんに歌ってもらいました。これも加古さんと、誰に歌ってもらうか相談して決めました。石川さんが加古さんのファンなんですよ。エンディングで流れます。

【根本大輝さんに感想を伺いました】
　小泉さんが映像作りで大切にしていること、高校時代の経験がどのように現在に生きているか、そして、小泉さんが役者に求める「演技」とはどういうものか、真剣に聞き入っていた根本さんにインタビュー終了後、感想を伺いました。


根本さんが手にしているのは 映画「峠」の台本

「監督のお話の中で、読書を大切にしていると聞き、自分もこれから本を読んでいきたいと思いました。演劇については、今、主流になっている誇張した演技ではなくて、監督が求めている、役に寄せてその役の魅力を伝えられるような演技をしていきたいと思います。一高の卒業生を見ていると、いろいろな業種へ道が広がっていて、各業界で活躍している人が多いと思います。そういった人たちに関わることが嬉しいですし、今日はいい刺激になりました。これからも演劇をがんばっていきたいです。」

　インタビュー終了後には、髙村祐一校長先生が自ら学校内を案内して下さいました。
　今回のインタビューをご快諾下さり、お忙しい中ご来校下さいました小泉堯史監督、調整をいただきました 39 会（S39 年卒同窓会）の小野邦夫様、そして髙村校長先生ほかご協力をいただきました皆様、誠にありがとうございました。

聞き手：　平戸正英（H13 卒）／磯　美保（S61 卒）
撮　影：　菊地克仁（H13 卒）

【小泉堯史監督の「峠 最後のサムライ」は 2021 年 7 月 1 日（木）全国ロードショーです】

累計約 284 万部超の大ベストセラー、司馬遼太郎の名著「峠」が初映像化! 幕末の動乱期を駆け抜けた“最後のサムライ”河井継之助を、名匠･小泉堯史が描く歴史超大作!!

－ ストーリー －

敵軍 50,000 人に、たった 690 人で挑んだ“最後のサムライ”

慶応 3 年(1867 年)、大政奉還。260 年余りに及んだ徳川幕府は終焉を迎え、諸藩は東軍と西軍に二分していく。

慶応 4 年、鳥羽・伏見の戦いを皮切りに戊辰戦争が勃発した。

越後の小藩、長岡藩の家老・河井継之助は、東軍・西軍いずれにも属さない武装中立を目指す。

戦うことが当たり前となっていた武士の時代、民の暮らしを守るために、戦争を避けようとしたのだ。

だが、和平を願って臨んだ談判は決裂。継之助は徳川譜代の大名として義を貫き、西軍と砲火を交えるという決断を下す。

妻を愛し、国を想い、戦の無い世を願った継之助の、最後の戦いが始まった……。

－キャスト－

役所広司　松たか子　香川京子　田中泯　永山絢斗　／　芳根京子　坂東龍汰　榎木孝明　渡辺大　AKIRA　／　東出昌大　佐々木蔵之介　井川比佐志　山本學　吉岡秀隆　／　仲代達矢

－ スタッフ －

監督・脚本：小泉堯史

音楽：加古隆

原作：司馬遼太郎「峠」（新潮文庫刊）

配給：松竹／アスミック・エース

公式サイト　https://touge-movie.com